


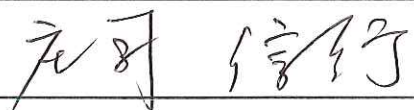

学 位 論 文 要 旨

氏 名 藤村 英佐子 

論 文 題 目

「緑内障性視野障害を有する患者の QOL に対する眼優位性の影響の検討」

指 導 教 授 承 認 印

「緑内障性視野障害を有する患者の QOL に対する眼優位性の影響の検討」

氏名 藤村 芙佐子

緑内障は今日、本邦における視覚障害の上位を占める疾患であり、特有な進行性視野障害を呈する。この緑内障性視野障害は適切な診断・治療および管理により進行を抑制し、患者の視機能を維持することは可能であるが、回復は不可能である。このため、早期発見、早期治療が重要となる。さらに、緑内障患者の quality of life (QOL) を維持するためには、良好な視機能を保ち、残存している視機能をより有効に使用することが必要となる。これまで我々は、緑内障において障害される網膜神経節細胞や網膜神経線維層を定量的に評価することが可能なスペクトラルドメイン光干渉断層計や眼底対応視野計 (AP[®]-7000 : KOWA 社製) を用いて緑内障の早期発見方法の検出について検討を重ねてきた。しかしながら、先にも述べたように、一度障害された視機能は回復することはなく、緑内障患者の QOL を維持・向上することも重要である。日常診療において、緑内障の程度や進行度を把握するために視力や視野検査の結果が用いられているが、これらの結果から患者の日常生活の不自由度を推測することや、患者の QOL を評価することは難しい。そこで、本研究では、緑内障性視野障害を有する患者に対し日常生活に関するアンケート調査を実施し、視野障害を有する患者の QOL に影響を及ぼす因子を分析した。また、患者は両眼開放下で日常生活を送っている。両眼開放下においては眼優位性（利き目）が存在し、さまざまな視機能に影響を及ぼしていることが報告されている。しかしながら、緑内障性視野障害を有する患者の視機能に対する眼優位性の影響について検討された報告は少ない。そこで、今回の検討では眼優位性に着目し検討を行った。

眼科領域における視覚関連 QOL を評価するアンケートとして近年、計量心理学的評価の高い健康関連 The25-item National Eye Institute Visual Function Questionnaire (VFQ-25) アンケートが多用される。VFQ-25 は視覚関連 QOL の 12 領域と 25 項目があり、全体的健康観、全体的見え方、目の痛み、近見視力による行動、遠見視力による行動、運転、周辺視覚、色覚、見え方による社会生活機能、自立、役割制限、心の健康で構成されている。これら各質問項目の回答を 0~100 点にスコア化して用いる為、統計学的解析に使用することが可能であり、緑内障患者の QOL に影響を及ぼす因子の分析に適していると考えられ、今回、VFQ-25 を用いて検討を行った。加えて、日常両眼開放下における視野障害の自覚の有無について聞き取り調査を行った。

対象は北里大学病院眼科外来に通院中の緑内障患者のうち、緑内障性視野障害を有しアンケートに同意を得られた 51 名である。なお、VFQ-25 には運転の項目が含まれているため、両眼とも矯正視力 0.7 以上の者を対象とした。また優位眼の決定には Hole-in-card test を用いた。VFQ-25 に影響を及ぼす因子として視野障害の程度を表すパラメーターである中心窩閾値・MD 値・PSD 値・VFI を用い、優位眼と非優位眼の計 8 つのパラメーターとの相関を統計学的に検討した。

VFQ-25 の評価項目の結果では、運転の項目が最も低いスコア 48.9 点であった。VFQ-25 の各項目のうち、「周辺視力」の項目が優位眼の VFI と相関を示すのみであった ($p=0.0307$)。また、日常両眼開放下において視野障害を自覚している患者は 13 名 (25.5%)、自覚のない患者は 38 名 (74.5%) であった。視野障害の自覚あり群における VFQ-25 「遠見視力による行動」項目において優位眼 MD 値、PSD 値に相関を認め (各々 $p=0.0365$ 、 $p=0.0231$)、「運転」項目において優位眼 PSD 値が相関を認めた ($p=0.0235$)。視野障害の自覚なし群においては「運転」項目と優位眼 PSD 値に相関を認めた ($p=0.0393$)。

これらのことから、両眼の矯正視力が 0.7 以上であり比較的視力が保たれているが緑内障性視野障害を有する患者の QOL に対して、視野障害が影響を及ぼしている可能性は低いと考えられた。しかしながら、運転についてはアンケートスコアが最も低く、多くの視覚情報を素早く同時に処理しなければならない場面では、優位眼の視野障害の程度が影響を及ぼしている可能性が示唆され、注意が必要であると考えられた。